サカキさんは許されない

ゆら

サカキさんは許されない

「…で、ユースケくんは４組の奈月ちゃんとはどうだったのさっ…４か。１，２，３，４、あらら俺一回休み」

「別に。何も。…５マス進む。…『次のターン二回サイコロを振ることができる』。シューゴはその手の話ホント好きだな」

「出たよユースケお得意の「別に」。何かあんだろーなんかさー。あーもう次っエージだぞ」

彦二矢高校２年３組の教室の片隅で、いつもの３人が集まりいつもの通りにゲームに興じていた。エージ、ユースケ、シューゴの三人は昼になると、窓側のはじにあるエージの席の周りへと集まり、食事をしながらゲームをする習慣があった。和気あいあいと楽しそうにし、うるさく騒ぐわけでもないため、クラスメイトたちは彼らに目を向けることはない。今はまだ。

「はいよ」

エージがサイコロに手を伸ばしたところで、教卓側のドアが勢いよく開いた。

「エージくんっ！！」

教室中の視線が一人の女子生徒に向けられる。と同時に教室にいた全ての生徒は一様にこう思った。「あ、来た」。
女子生徒は駆け足でエージへと近寄り、胸に抱えていた大量の袋入りパンを机の上にぶちまけた。パンの波が押し寄せる前に、既に三人ともすごろく盤と弁当箱を手で持ち上げていた。

「エージくんが昨日パンを食べたそうな目でこちらを見ていたから！エージ君の好きなパン買って来ました！だからあの時のことは許して！」

「いえ、サカキさん、生憎ですがそのパンはお断りします。悪いですし、僕の気分が。まるで僕がパシらせたみたいじゃないですか。あと許さない絶対」

「そんなこと言わず！さぁ！パンと私の愛情を受」

「あ”？」

「ごめんなさい」

エージを怒らせ反射的に頭を下げるサカキだったが、すぐに顔を上げ、

「じゃあ私の事をサカキさんじゃなくアキラって呼び捨」

鬼の形相をしたしたエージが立ち上がり、サカキは急いで教室をあとにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「うん、今日もいつも通りだったな。」

エージがサカキを追い回し廊下へと出て行ってから、シューゴが呟く。その言葉にユースケは「あぁ、いつもの通りだな」と答えた。

「で、許す許さないってなんのはなし？」

シューゴがユースケに尋ねる。

「当事者に聞け」

サイコロを振りながらユースケが言う。出た目は４。

「あがり。終了、また明日」